めとてラボ 2024 活動レポート

MetoTe Lab 2024 Activity Report

めとてラボは
「私を起点に新たな関わりの回路と表現を生み出す」ことを
コンセプトに「ホーム（文化の創造拠点）」をつくる場です。

「め」と「て」を通して生まれたものを捉えなおし、
身近な暮らしのなかにある歴史や文化から創発を生み出すこと、
そしてさまざまな身体感覚や思考を持つ人と人とが出会い、
新たな関わりを広げる方法を模索しています。

20:26:17
2002.12.24

ホームビデオ鑑賞会

各地に残る地域特有の手話や、身近な暮らしのなかにあるろう者の生活文化の映像を通して、手話話者の暮らしや文化の記録を残すコミュニティ・アーカイブプロジェクト。

さまざまなバックグラウンドをもつ参加者が一つの映像を見た時の受け取り方を話し合い、ろう者の生活文化や習慣、歴史をどのようにアーカイブし語り継いでいくのか、その方法を模索中です。

※めとてラボでは、ろう者のいる家族間での会話の様子やろう者の生活文化が映された映像をホームビデオと呼んでいます。

2024.8.25 @5005

「ホームビデオ鑑賞会」を一緒に作りませんか？

昔、着物着用が当たり前の時代では、女性の手話表現はゆっくりで上品だったそうです。映像のなかで会話をしている様子から当時の時代背景や手話と衣服の関係性に気づくといった面白さがありました。

2024.11.24 @5005

ホームビデオ鑑賞会

小さい頃の家族と過ごしたクリスマス会の様子を観て、あの時に体験したことやわくわくした感覚を思い出し、自分のこどもにも同じようにしてあげたい気持ちが生まれました。ホームビデオは過去を振り返るイメージが強くありましたが、今後の人生において過ごし方を考えるきっかけにもなると感じました。

当時の背景を語らい、時代の移ろいに気づく

デフスペース
リサーチ

ろう者の感覚や独自の行動様式、そこから育まれたろう文化を取り入れた空間デザインを「デフスペースデザイン」と言います。

デフスペースリサーチメンバーが、ろう者の家族が暮らす 個人宅に伺い、空間構成やデザインの工夫など、その家のデフスペースデザインをリサーチするとともに、その家に暮らす人々へのインタビューに取り組みました。

身近な「家」に着目したリサーチを開始

ある家では、当時、小さいこどものために、ろう者の両親が視覚的にこどもの安全を確認できるよう、各部屋を仕切る壁の高さを全て90センチに揃える仕様へ。こどもの成長に合わせてドアや壁を後付けできる仕組みにもなっているそうです。

2025.2.26〜3.2 @5005

展覧会「DeafSpace Design ろう者の身体×家」

生活に関わる「家」に焦点を当て、実際にろう者が住まう空間で得た知見のリサーチ報告となる展覧会を開催しました。どのような会話のなかで「家」ができていったのかを映像や写真で展示し、5005の天井に張り巡らされたワイヤーのカーテンやライトを活用しながら、デフスペース独自の展示空間を創り上げました。

ろう者の感覚や視点を活かした空間の可能性を探る

めとて
スタディシリーズ
～CL勉強会～

「め」と「て」から自然と生まれた遊びを集めたり、遊びが生まれる仕組みや場を作るプロジェクト。手話話者に向けて視覚的な表現の幅を広げ磨くワークショップを実施しました。

CL表現とは

CLとはClassifier(類別詞)とも言われる手話独特の表現。代名詞の役割を果たしながら、ものそのもののイメージを伝えます。

※木村・市田(2014:26)は、CLを「ものの動きや位置、形や大きさなどを、手の動きや位置に置き換え」るものと定義しています。
(松岡和美著『日本手話で学ぶ 手話言語学の基礎』(2015)p.95より)

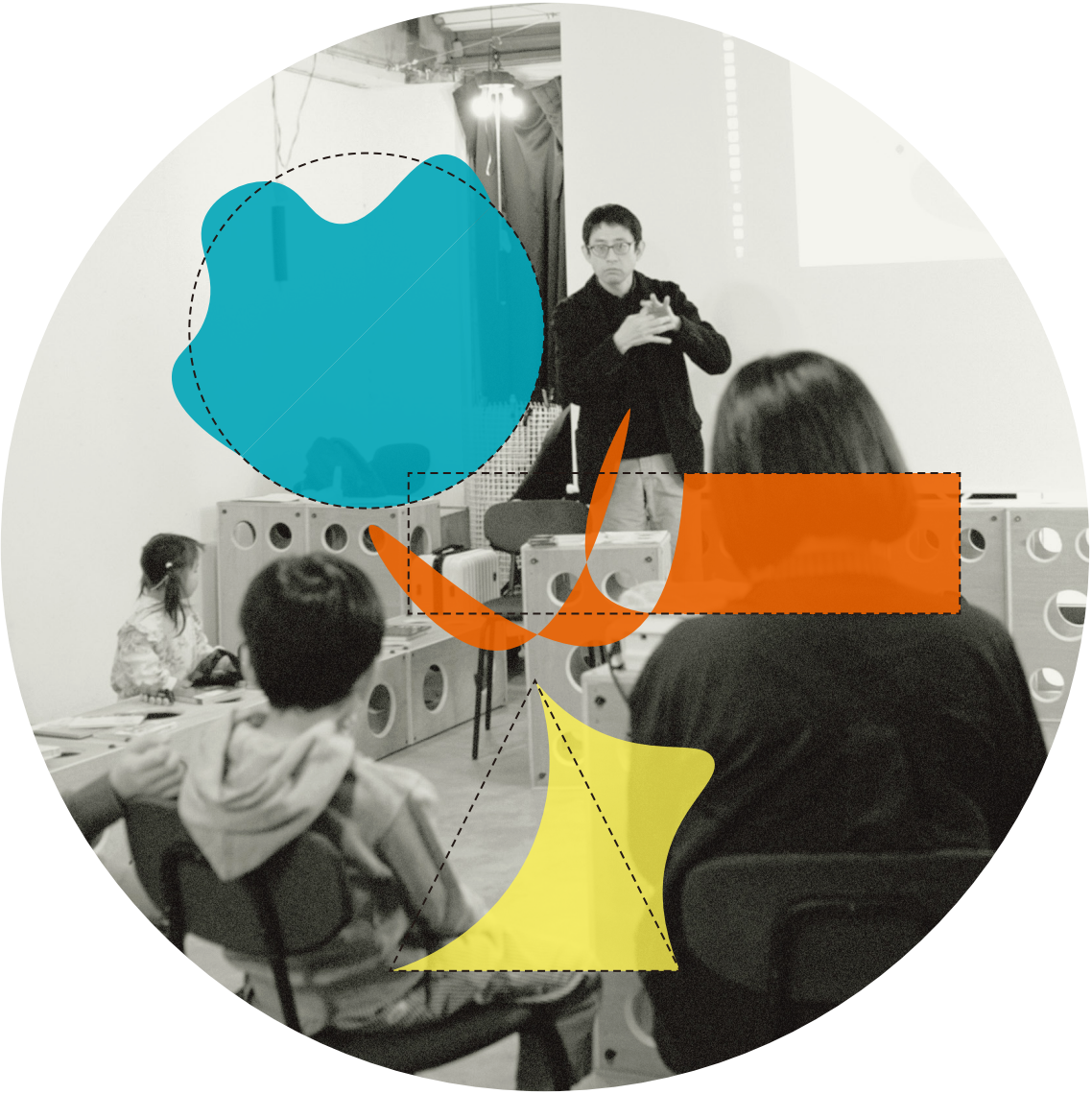
2024.7.7&15 @5005
めとてスタディシリーズ
「佐沢静枝さんとCL表現を実践してみよう！」

形の大きさや模様の表現の表し方など、その表現の視点も重要なポイントであることを学び、自分の表現が他者からどう見えるのかを俯瞰して捉えることも、視覚言語の表現の幅を広げるのだと実感しました。

2025.2.1 @5005
めとてスタディシリーズ
「數見陽子さんとCL表現を実践してみよう!」

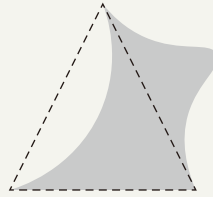
この勉強会では、CLに不可欠な副詞を意識しながら表現することを学びました。単にCLを表現するだけでは、伝えたい情報が十分に伝わらないため、副詞が重要になります。「ゆっくり歩いてきた」を表現する場合、副詞の「ゆっくり」+「歩く」CL表現で、"どれくらいゆっくり歩いた"のか、表情と手の動きで伝えることができます。

頭のなかのイメージを表し、ともに景色を見ながら伝えあう



アソビバ

同じ場所で同じおもちゃがあっても、こどもによって遊び方は異なります。なぜそのような違いが生まれるのか？家庭や生活文化がこどもたちのアソビにどのような影響があるのか？それによりこどもたちのアソビにはどのような変化があるのか？こうした問いを追求するために「めとてアソビバ研究チーム」が発足しました。



「こどもたちは、どこでもなんでもアソビに変える力がある」

こどもたちが遊ぶ様子を撮影した映像からは、こどもたちから生まれてくるアソビは、遊ぶ環境（＝アソビバ）の影響を強く受けたり、大好きなパパとママと関わり合いながら受け継がれていくものと、創り出されていくものがあると実感するシーンがありました。

2024.12.26 @5005
めとてスタディシリーズ
「こどものアソビの世界を探ってみよう」

講師を招いて、ろう・難聴児のアソビの行動の捉え方などをレクチャーいただきました。また、実際の遊びの様子を撮影した動画を見ることで、こどものアソビの世界を覗きながらこどものアソビの捉え方をともに深めていきました。

自由で柔軟な発想で無限に生まれるアソビ

文化拠点

「手話×出会いの文化センター」5005を活用し、「0から、めとてでうまれる自然な文化を耕していく」ための文化拠点を発信し、ネットワークを構築するプロジェクト。8月より、拠点を実験的にひらく企画（5005開放日）をスタートしました。開催スケジュールは公式SNSより確認いただけます。

Twitter (@metotelab)
instagram (metote.lab)
note (めとてラボ)

印象に残ったシーン

「SHAPE IT!」を使ったミニ企画では、ろうの小学生が飛び入り参加し、初めて会った聴者の大人達と手話や身振りを通して頭の中のイメージを伝え合う風景が見られました。それは、親御さんが「こんな表現力があったなんて！」と驚いてしまうほど。イメージが通じた瞬間、全員に笑みがこぼれ、「め」と「て」から培う文化の可能性を感じる瞬間でした。

「5005のイベントは敷居が高い」「遠方でなかなか行けない」という方が立ち寄ってくださる印象です。その場で初めて会った者同士がゆるやかに繋がり、デフスペースの空間の中で、感覚が解けていく瞬間を味わってほしいと思います。まだまだ実験中ですが、ミニ企画も取り入れ、まちへのひらき方を検討しています。

視覚言語からなる自然な文化を耕す場

metalab.com
DeafSpace（デフスペース）リサーチ
ホーム（50/5）
ホームビデオ鑑賞会
つなぐラボ

めとてラボ
ウェブサイト

めとてラボの活動コンセプトを、各プロジェクトのこれまでに実施してきた企画の様子を伝える写真とともに紹介しています。また、それぞれの活動のイメージが膨らみやすいよう、イラストでも表現しています。

画面を下へスクロールしていくたびに登場するイラストは、誰もが「め」と「て」で語らい、そこから生まれる自然な文化を耕していく場と、新たな可能性を拓いていくラボラトリーを表しています。

https://metotelab.com/

ここからまた新たに生まれる可能性や出会い

めとてラボ
2024
活動レポート

企画制作：めとてラボ
執筆・編集：仲菜摘、和田夏実、嘉原妙
デザイン：木村里奈
発行日：令和7年(2025年)3月21日
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京 東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス5階
TEL：03-6256-8435
FAX：03-6256-8829 http://www.artcouncil-tokyo.jp
印刷・製本：株式会社ショウエイ
主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人ooo
ISBN：978-4-909894-58-8

東京都

ARTS
COUNCIL
TOKYO

「めとてラボ」は2022年4月より東京アートポイント計画のアートプロジェクトの一つとしてスタートしました。視覚言語（日本手話）で話すろう者・難聴者・CODA（ろう者の親を持つ聴者）が主体となり、一人ひとりの感覚や言語を起点とした創発の場（ホーム）を作ることを目指したラボラトリーです。コンセプトは「私を起点に新たな関わりの回路と表現を生み出す」こと。素朴な疑問を持ち寄り、めとてで語らいながら、わたしの表現を探り、異なる身体感覚、思考をもつ人と人、人と表現が出会う機会やそうした場の在り方を模索しています。

東京アートポイント計画とは
社会に対して価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOと共に展開している事業です。実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。また、自治体と文化事業を共催する「東京都・区市町村連携事業」を実施しています。